第11章　激震

1

野宮甲太郎（のみやこうたろう）は口をモグモグと動かしながら、不機嫌な顔で空を睨（にら）んでいた。

濃淡の入り混じった灰色の雲は、三方を山に囲まれた空を隙間なく埋め尽くしている。

「降るなら早く降りやがれ」

白衣の下の突き出た腹が、悪態に同調してぶるんと揺れた。

野宮は中途半端が嫌いだ。それは人為の及ぶか及ばないかにはよらない。現に今も降りそうで降らない天候にいらつきを隠さない。

野宮は噛んでいたガムを空の一角に向かって吐き捨てた。ガムは見事な放物線を描いて、ゴミ箱に吸い込まれていった。

「あー、ゆっくりと寝てみたい！」

大声に大きな欠伸が続いた。

午前七時。京都工業大学の広いキャンパスは静かな朝を迎えた。

昨夜は日付が変わるまでラボにいて研究員たちの陣頭指揮を執(と)っていた。目の奥にはモニターに明滅する解析データや実験室のレーザー光の残像が焼き付いている。野宮は眉間を乱暴に揉みほぐしつつ、仮住まいにしているゲストハウスの玄関から外へ出た。

向かう先には、彼の所属するエネルギー工学研究所、通称エネ研がある。

学生として入学して以来二十余年。彼は青春をこのキャンパスで過ごし、長きに渡る研究生活を送ってきた。博士課程一年の時に、たまたま助手のポストが空席になり、誘われて教員となった。元来が頑固なこだわり屋で、適当に周囲と折り合いをつける社会性は持ち合わせていなかった彼にとって、その誘いはまさに渡りに船だった。

以後、他の講座の教授連や事務畑の人間たちと衝突を繰り返しながらもここに居続けられたのは、自分を助手に引き立ててくれた恩師、筵潟(むしろがた)教授のおかげだ。

教授はこの春、定年を迎えた。にもかかわらず依然として研究室に鎮座しているのは決して当人の意思ではない。

筵潟研究室の卒業生にして、ブラックホール研究の世界的権威として名を馳せた伊里江真佐吉。彼はこともあろうにブラックホールを研究室の中でこしらえてしまった。それが自分や世界にどのような影響を及ぼすのかも

考えずに。
伊里江は自らの研究がイカサマであったという言葉を残し、失踪した。
だが再び世に現れた時、伊里江はテロリストと化していた。彼は指先一本で北海道の大地を、六百万人の命とともに宇宙の藻屑と消したのだ。
伊里江は政府に対して強圧的な要求を突きつけた。今度は北海道程度では済まないぞという脅し付きで。
政府も手をこまねいてはいなかった。伊里江の出身大学――中途退学だが――の京都工業大学に、伊里江に対抗する方法はないものかと相談を持ちかけてきた。いや相談などというレベルではない。
『お前たち研究者が後先考えずに突っ走るから、こんな事態に至ったのだ。自分の尻は自分で拭いてもらおう』
言葉は違うがそれに近いことを、入れ替わり立ち替わりやってきた政府の役人や代議士は言外に臭わせた。
おかげで春先から、筵潟研究室はずっと臨戦態勢が続いている。
ブラックホール研究は、天才伊里江がアメリカに渡った時点で後塵を拝してたが、以後も地道に研究は続けられていた。伊里江がペーパーや報告の形で残したものを取り入れて、遅ればせながら今、彼が持ち逃げした研究の秘密に迫ろうとしている。

しかし――。

間に合わない。それが研究室としての結論だった。もちろんそんなことは口が裂けても言えない。「あと少し」と具体的な報告を避け続けている。政府が「あと少しでワクチンが完成します」と空証文で世間の騒ぎを収めようとしたのと大差はない。

とはいえ、自分たちの研究が全く役に立たなかったかと問われれば、椅子を蹴って立ち上がり、こう怒鳴り散らすだろう。

「リアルワールドへの道を開くことができた。あんたがたがリアルを捕えてくれれば、一括りにして向こうの世界に投げ返してやる！」

実際、昨日の報告会で野宮はそれをやった。Xデーが近づくにつれ、いら立ちを隠せない政府のお目付役に浴びせてやったのだ。隣りに座った筵潟教授が、その辺にしときなさいと制止の手を上げなければ、相手の椅子まで蹴り飛ばしていたことだろう。

（ふんぞり返って威張ってる暇があったら、リアルの一人でも引っ張って来いってんだ。噂では、銃で撃ったくらいじゃ死なないって話だから、送り返すしかないじゃないか）

野宮は足許（あしもと）の石くれを拾い上げた。両足を揃え、ピッチャーのモーションよろしく、大きく振りかぶって投げ

た。石くれは狙い過(あやま)たず、遥か離れた外灯のポールに当たった。カーンと鋭い音が辺りに響く。

すると、それが合図ででもあったかのように、銃器を身に付けた連中が駆け寄ってきた。みな一様に迷彩服を着ている。野宮がニヤニヤ笑いを浮かべて眺めていると、迷彩服たちは「またお前か」という顔で睨みつけながら、もと来たほうへと戻っていった。

彼らは二十四時間態勢で学内を警備している。国が派遣した部隊だが、警察や自衛隊とは無関係と聞く。

エネ研は今日本で最も重要な場所だ。伊里江に対抗する最後の砦と言っていい。野宮もその自覚を持って日夜結果を出すべく励んでいる。

よってそこに携わる者に不測の事態があってはならない。研究者が安心して仕事に没頭できる環境を保つ必要がある。

昨今の世情は極めて不安定で、先の予測がつかない。現に東京ではデモ行進が起きているし、長野では私設警察もどきの奇妙なグループが跋扈(ばっこ)しているという。

京都も例外ではない。「家でじっとしているように」との政府勧告を無視し、世界の終末が近いとばかり暴れている連中がいる。昨夜もキャンパスの壁際で何度か騒々しい警報が鳴った。不逞(ふてい)な輩が近寄ったのだろう。野宮の寝不足の一因である。

（それよりうっとうしいのは、この連中なんだ）
別の迷彩服がふたり、鋭い視線をよこしながら通り過ぎていく。野宮はおどけた顔で口笛を吹き、カニのように横歩きをして見せた。迷彩服のひとりは顔を真っ赤にして突っかかろうとしたが、相棒が相手にするなとたしなめた。
（お前たちの本当の任務は、俺たち研究者の監視じゃないのか？）
研究を放り出して逃げることのないよう、背後の暗がりから静かに銃口を向けている。野宮にはそう思えてならない。
（なんでこんなことになったのかねえ）
エネ研の玄関が近づいてきた。
ふと、遥か右手にある通用門に目が留まった。わらわらと迷彩服たちが駆け寄っていくのが見える。どうやら重い門扉の向こうで、誰かが喚いているらしい。
なんとなく虫が騒ぐ。
野宮は吸い寄せられるように通用門へのスロープを降りていった。

2

「――話の判らん奴らだな！　俺はただ母校が恋しくて

やってきただけなんだ。そんな愛校心豊かな卒業生の純情を踏みにじるな。さっさとここを開けろ！」
遠目には檻の中の熊が吠えているようにしか見えないが、どうやられっきとした人間らしい。
（卒業生だと？）
野宮は白衣を風になびかせながら、通用門への道を降りて行く。
熊男（くまおとこ）と重厚な門扉をはさんで対峙しているのは、十人ほどの迷彩服である。一様に銃器を胸の高さに掲げ、散開して威嚇発砲の体勢をとっている。
「何人たりとも入校することを禁止している。早々に立ち去りなさい」
ひとりの迷彩服が口癖になっているセリフを暗唱した。
熊男はむっと眉を寄せ、ガシガシと門扉を揺すった。
「そんなこたあ一目見りゃ判る！　一般人立ち入り禁止の文字も読める！　俺はただ筵潟教授の顔を一目見たいだけなんだ！」
（むう、ウチのオヤジさんを？）
「教授が学内で倒れたと聞いた！　だから俺は教え子として居ても立ってもいられず、こうやってすっ飛んできたんだよ！」
突然、熊男はスッと腰を屈めた。迷彩服たちに緊張が走る。

「とりゃっ！」
熊が飛んだ！　野宮は面食らって空を見上げた。
しかし熊男は単に門扉の上部に両手で掴まったに過ぎなかった。門扉は高さだけでも大人の背丈の優に二倍はある。どうやら是が非でも侵入するつもりらしい。
「コラッ、降りなさい！」
場のリーダーらしき迷彩服があわてて前に出た。まさかこれだけの銃口を前にして強行突破を試みるとは思ってもいなかったのだろう。
熊男は門扉にぶら下がったまま、再度吠えた。
「センセー、筵潟センセー！　あなたの愛弟子、久保田陽平ですー」
（久保田？　クボタ、クボタ……）
野宮は頭の中で卒業生名簿を繰った。そんな名前があったような、なかったような。
その時、熊男は太い腕の筋力にものを言わせ、上半身を門扉の上に持ち上げた。
（バカか？　死ぬぞ！）
案の定、ひとりの迷彩服が撃つ構えを見せた。
「副長、コイツはきっとリアルです。伊里江の命令でココを爆破しに来たんだ！」
「ナニッ？」
幾分おっちょこちょいの気のある副長は部下の言葉に

まなじりを上げた。他の連中も付和雷同して銃を熊男に向ける。
野宮は急いで周囲を見回した。
手入れを忘れられた植栽の下には砂利が巻き散らしてある。野宮は適当な砂利石をつかみ上げると、身体を右に向けて両足を揃えた。
ふいに喚声が四方から押し寄せて来た。二十年前、甲子園出場を賭けた地区予選の決勝戦が眼前によみがえる。
フル出場で投げ続けていたエースが打たれ、一方的に大差のつけられたゲームの勝敗は既に決していた。
あとひとり。満塁で迎えた最終回のツーアウトでマウンドに立った野宮は、この日八打点の四番打者を三球三振に打ち取った。
それまでの鬱憤（うっぷん）を晴らす機会を作ってくれた野宮に、観客は惜しみない拍手と賞賛の声を送り続けた。
（俺の人生最高の瞬間――）
セットポジションに入った野宮は、硬球に見立てた砂利石を渾身の力を込めて投げた。
石は迷彩服たちの頭上を越え、狙いどおり熊男がその重い体重を支える両手の隙間に当たった。ガーンという派手な金属音が反響し、辺りの空気を震わせた。
「うわっ」
熊男は腹と耳に衝撃を受け、たまらず手を放すと地上

に尻から落下した。
迷彩服たちは突然の音の原因が判らず右往左往した。きょろきょろと顔をめぐらせると、
「あっ」
近づいてくる野宮にようやく気がついたらしい。何人かが顔をしかめる。
「あんたらに言っておく。その熊さんはリアルなどではないぞ」
「な、なんで判る？」
副長が精一杯の虚勢を張る。石の音にビビって首をすくめていたくせに。
「そいつの耳を見てみろ」
野宮は指さした。
熊男は地面に尻をついたまま、タオルを巻いた頭をこちらに向けた。
彼の右側の耳はおよそ半分がなかった。耳たぶはいびつなシルエットを縁取っており、その傷ができてまだ新しいことを物語っていた。
全員が注目したのはその傷口だ。砂が押し固まったような具合でちぎれた箇所を覆っている。
それがヴァーチャル特有の傷跡であることは迷彩服の誰もが体験で知っていた。大きな損傷は身体を丸ごと砂に変えてしまうが、ある程度小さな傷だと砂状化はわず

かな進行でストップする。野宮はそれを気づかせたかったのだ。
彼はどけどけと銃器を払いながら前に進むと、拳を作って門扉をゴンゴンと叩いた。
「ここを開けてくれ。卒業生を丁重に迎え入れたい」

3

なおも規則がどうのと言い募る副長を無視して、野宮は自ら重たい門にその両手をかけた。
副長は取り乱した口調で、おいレーザーを切れと守衛所の部下に叫んだ。部下は返事もそこそこに壁のレバーへと駆け寄る。
大学の周囲には至るところにレーザー防御装置が設置されているが、防御と言いつつ、じつは熱線を発射する代物である。何も知らずに出入りしようものなら、鳥でも猫でも黒焦げになってあの世行きだ。
いま野宮はＶＩＰと称すべき人材である。迷彩服たちが慌てふためくのも無理はなかった。野宮はそれを知っていて強引に門を開いたのだ。
（目の前で熊が蜂の巣になるのは見たくないからな）
開いた門の向こうで、熊男は満面の笑みを浮かべて立っていた。野宮は入ってこいと首で促した。

「待て」顔を潰された副長が野宮に迫る。「コイツが口にしたことは本当ですか？」
「あん？　何だっけ」
「教授が倒れたとか」
野宮は面倒くさそうに熊男を振り返ると、顔を前に戻し、
「知らん。昨夜、最後に会った時はお元気だった」
「や、やはり」副長はなすびのような顔を紅潮させると、熊男の腕をがしっと掴んだ。「この野郎、でまかせで言い逃れられると――」
その時である。エネ研のエントランスから、おかっぱ頭の女性が飛び出してきた。彼女は通用門に野宮を発見すると、血相を変えてスロープを駆け下りて来た。
「野宮先生！　筵潟先生が大変ですー！」
野宮も副長も、ぎょっとなった。
「大変って、どういうことだ？」
「お部屋で倒れたと連絡が――」
野宮はすでに駆け出していた。が、背後の問題を思い出し、
「おい熊男、付いてこい。それから副長、あんたも来てくれ」
熊男は放せとばかり副長の手を振りほどくと、野宮に従って大股で走り出した。副長も勝手にさせるかと、ふ

たりの後を追う。
熊男はすぐ野宮に追いついた。でっぷりと肉の付いた野宮の駆け足は至ってノロい。
「おいクマ！　お前どうして教授の具合が悪いのを知った？」
「今朝方、教授を訪ねてご自宅に寄ったんですよ。そしたら奥さんしかおられませんでした。するとそこに教授自身の電話がありましてね。苦しい、苦しいって」
もっともらしい話だが、野宮にはにわかに信じられない。
「教授はゲストハウスのほうですね？」と熊男。
「コラ、俺より先に行くな。だいたい久保田なんて名前、卒業生名簿に載っとらんぞ！」
「俺は中途退学なんですって！」

筵潟教授は、床の上に仰向けに倒れていた。久保田の言葉は嘘ではなかった。
「先生、しっかり！」
野宮は久保田の手を借りて、教授をベッドの上に寝かせた。怪我の有無を一番先に確かめたが、どうやらそれはないようだ。
「先生！」「先生！」
ふたりの呼ぶ声に筵潟教授はうっすらと目を開けた。

その細い手が宙に伸びる。
　還暦を迎えたばかりの教授は、もう一回り上に見えるほど、外見は年寄り然としている。百六十センチに満たない身体は松の古木を連想させ、少なくなった白髪や白い髭、皺だらけの顔の細い目などの印象も手伝い、どこか木彫りの仏像を連想させた。
「お前は確か……」教授の手が伸びた先に、自称退学生の顔があった。「久……久保田だったな？」
「覚えていてくださいましたか！」
　久保田は泣きそうな声で答えながら、その細い腕をしっかと掴んだ。
　その巨体を押しのけて、野宮が教授の顔を覗き込む。
「先生、お加減は？」
「ん～、大丈夫大丈夫」教授は細い目をさらに細くして微笑んだ。「ただの貧血だ。あわてて家内に電話してもうたが、大したことはない」
　ホッと野宮は安堵の息をついた。筵潟教授はこう見えても日本の宇宙物理学界の重鎮であり、進行中のプロジェクトのリーダーである。病に伏せられては一大事だ。
「そんなことより、そのむさ苦しい顔をどけい」
　野宮は肩をすくめると、背後から覗き込んでいた副長に、もう大丈夫だと告げた。副長は職務を果たしたという顔付きで出て行った。

部屋の入口が閉まると、筵潟教授はベッドの上にガバッと起き上がった。さらに野宮が唖然としたことには、声高らかに笑い出したではないか。
「先生？」
「愉快、愉快」教授は膝を叩きながら「野宮よ、すべてはこの久保田を構内に引き入れるための策略だ。悪く思うなよ」
「策略ですって？」
教授は再びベッドに横たわり、枕に頭を落とした。
「詳しいことはそいつから聞け。私はもう一眠りする。すぐにトコトコ歩いて行っては、仮病だったとバレてしまうからな。かっかっかっ」
教授は黄門様のような笑い声を上げた。
「……外に聞こえますよ」
野宮がむくれた声でたしなめた。

4

（クソ面白くもない。助教授の俺の頭越しに事を企むなんて！）
野宮は不快感をあらわにしながら、革張りのソファにどすんと体重を預けた。
表に「野宮助教授」と表札の掛かっているこの部屋は、

エネ研にある彼の私室である。教授倒れるの報にあわてて駆けつけた野宮は、それが嘘だったことを知らされ、憤懣やるかたのないまま、ここに戻ってきたのである。

「失礼します」

怒りの源が野宮の正面に腰かけた。久保田陽平。十五年前に筵潟研究室から逃走した男。

エネ研の内部に立ち入ることができる人間はごくわずかで、もちろん関係者のみである。野宮も毎朝エントランスをくぐる時、眼と手の平を所定の装置にかざし、認証を受けないと入ることはできない。

久保田の在学中には認証システムはまだ導入されていなかった。そこでデータベースに登録されていた久保田の顔画像を呼び出し、同定したところ、九十パーセント以上の確率で同一人物と認識された。

他に場所もない。野宮はしかたなく久保田をエネ研に入れ、自室へと連れてきた。いや〝連行〟した。

「説明してもらおうか」

冷たい声で腕を組むと、真正面から久保田の顔を睨みつけた。久保田は殊勝げにタオルを頭から外すと、ボリボリと頭髪を掻きむしった。フケが粉雪のように空中を舞った。

「私のことはもう？」

「ああ、思い出したよ。俺が院生だった時、プレゼミに

参加した四回生の中にいたよな。柔道をやってたといって、カリフラワーの耳が記憶に残ってる」
野宮はチラと久保田のちぎれた耳たぶに目をやる。
「はい、私が入院した時、先生は助手になられたばかりでしたね」
〝入院〟とは大学院進学を指す隠語だ。逆は当然〝退院〟。
「思い出話に浸ってる時間はない。さっさとお前の魂胆を洗いざらい吐いてもらおうか」
「判りました。全部お話しします」
そう言うと久保田は、昨日から今朝にかけて身を以て体験したことをつぶさに語り始めた。
加太のホテルで数年間料理長を務めていたが、不穏な世情のあおりを受け、営業を停止することになり、自分たち従業員は各々実家などに戻ることになった。久保田の実家は近江八幡だったので、同じく滋賀に行きたいという客を同乗させた。その中の女の子のひとりがリアルだった。
「リアルだと？　お前、その言葉の意味を判って言ってるのか？」
「ええ、彼女たちに教わりました」
リアルの女の子、光嶋萠黄は途中で奈良の自宅に戻りたいと言い張り、自分は軽い気持ちでそれに付き添った。

危険があると彼女は忠告したが、まさか武装した迷彩服が待っているとは思いもよらなかった。どうにか自分たちは彼女の家にはいることに成功し、彼女は必要なものを手に入れることができたが、銃撃戦の末、迷彩服のふたりは命を落とした。

「ふむ。それで？」

野宮は知らず知らず話に引き込まれてた。彼はリアルについての知識は持っているが、その実態はよく知らないのだ。

「萠黄さんは、浴びせられた銃弾を跳ね返したようです。それも相手の身体に」

「……」

昨日読んだ報告書を野宮は思い出した。秋田で発見された十代のリアルの男性も、撃たれた弾を手で払いのけたという信じがたい話が書かれていた。結局その男性は、言葉では言えないような方法で殺害されたという。

「迷彩服の男性のほうは私の友人で、やはりこの研究室にいた男だったんです。彼は死ぬ間際、筵潟先生を訪ねろと教えてくれました。リアルが死なずにすむ解決策があると」

野宮は目を閉じ、口を真一文字に結んだまま、静かに久保田の話に聞き入っている。

「それで萠黄さんらを車に乗せ、こちらに向かうことに

しました。運転してる間に迷彩服の友人が話したことを聞かせると、同乗する他のふたりが補足してくれましたよ。聞けば聞くほど突飛で恐ろしい話でしたが、信じるしかないと思うようになりました」

（恐ろしい――。まったくだ。俺だって研究者でなきゃ、とっくに逃げ出してるところだ。でも逃げるってどこに？）

「ここに到着したのは昨夜、午前二時頃でした。勢いで来ちまいましたが、さすがに夜中に訪問したってしょうがねえ。そう思って離れたところから懐かしの母校を見上げますと、驚いたことに不夜城みてえに明かりが煌煌とついてるじゃありませんか。正門には櫓みてえなものが聳り立っていて、銃を構えた迷彩服が目を光らせてる。まるで犯罪者の奪還を恐れるどこぞの刑務所みてえだ。何だよこれは、とビックリしっぱなしでしたよ」

話が熱を帯びるとともに、べらんめえ調が混じってきた。身振り手振りも増える。これが久保田の地なのだろう。

「通用門なんかにもまわってみたんですが、こちらも鉄壁な警戒態勢を敷いてやがる。試しにおーいと声をかけてみたらいきなり警報が鳴り出しましてね。耳障りな靴音が集まってくるし、這々の体で逃げましたよ」

「あれはお前だったのか」

どうもお騒がせを、と神妙に頭を下げる。
「それで、これじゃ埒があかねえと作戦を変えましてね。記憶を頼りに直接、筵潟教授のお住まいを訪ねたんです。夜明けを待って呼び鈴を鳴らしたら、お懐かしや、奥様が応対に出てくださって。で事情を話し、どうしても教授にお会いしたいと頭を下げたら、ありがたいことに奥様、判ったと言って教授の携帯に電話で連絡してくださいました。その時に教授は『直接訪ねてきても構内には入れない。だからこうしよう』と作戦を伝授してくださり、それに従って、さっきご覧になったような一芝居を打ったと、ざっとこういうわけで」
「何がこういうわけでだ、ふざけやがって！」
野宮はやにわに立ち上がると、執務机に近づき、テレビ電話に指を延ばした。
「お前のような不遜な侵入者は言語道断だ。迷彩服どもに引き渡してやるから覚悟しろ！」

5

「ちょ、ちょっと冗談はやめてくださいよ」
久保田は顔色を変えた。
「冗談なものか」野宮は居丈高な態度で冷たく言い放った。「いいか？　この世界じゃリアルは厄介者だ、悪性

の病原菌みたいなものだ。そんな連中に味方するお前のような奴は、人類の裏切り者と言っていい。さっさと迷彩服に処刑してもらえ」
「違う！」
久保田は立ち上がると野宮に駆け寄り、電話に延ばされた腕を太い手で掴み止めた。
「放せ」
野宮は腕を振ったが久保田には敵わない。
「聞いてください。あのコは病原菌なんかじゃありません。ごく普通の人間です。たまたま白羽の矢を立てられてリアルになっただけなんです。言ってみりゃあ、あのコも被害者なんですよ。違いますかい？」
「……」
「イワの話だと、リアルを元の世界に送り返すことができるそうですね。ここの研究室がそういう装置を開発したと教えてくれましたよ。ブラックホールの暴発を防ぐのは間に合わないけど――」
「おい！」野宮は血相を変えた。「誰に聞いた？　間に合わないなどと」
「へ？　岩村です……死んだ迷彩服の友人ですが」
野宮は舌打ちした。秘密が漏れている。いや秘密というほどのものでもない。ここにいる研究員の誰にでもいい、それとなく訊ねれば判ってしまうことだ。

（俺たちは負けた。たったひとりの天才、伊里江真佐吉に、俺を含めて我が国最高の知性が寄ってたかっても敵わなかった……。クソッタレ！）

野宮は足許のくずかごを蹴り飛ばした。床の上に紙屑が散乱する。久保田が目を丸くして野宮を見つめる。

「――それだけか？」

「は」

「他に言いたいことはないのか？」

久保田は野宮から手を離した。野宮も電話から指を下ろす。

「――萠黄さんたちは一生懸命なんです。彼女はもうひとりのリアルの男と、ヴァーチャルの女友達といっしょにここまでずっと逃げてきたそうです。何度も死線をくぐったと言います。単なる民間人の彼女らがそんな苦労を強いられてるにもかかわらず、自分たちの力で解決方法を模索してるんです。正直、胸を打たれたっていうか……。

俺には可愛い妹が近江八幡に住んでます。一分一秒でも早く彼女のもとに行ってやりたい、怖がってるのを安心させてやりたいと思ってます。でも萠黄さんらを放ってはいけない気がするんですよ。これまで人生逃げてばかりだったけど、今度ばかりは逃げちゃいけないって。

でも俺だけじゃ何の力にもなってやれません。だから

昔いたこの研究室を当てにするしかなかった。イワの遺言がなければ、二度とこの学校の敷居をまたぐことはできなかったでしょう。

今朝、筵潟先生のお宅を訪ねたのも、かなり勇気が要りました。下手すればそのまま迷彩服に通報される可能性もあったわけですからね。

先生は意外なほど優しい言葉を掛けてくださいました。私のような中途退学者を覚えてくださっていたことも感激でしたが、『戻っておいで。ここはお前の古巣だ。スタッフ共々歓迎するよ』なんて言ってくださり」

久保田は床の上にどすんと腰をおろした。手で顔面を拭っている。

（泣いてるのか？）

野宮は壁際に設(しつら)えられた書架に目をやった。そこには彼の著書がずらりと並んでいる。三十代後半にして既に恩師である筵潟先生の著書数を超えた。学会誌への寄稿や報告書などを含めると倍ぐらいになるかもしれない。

研究活動は競争でもある。それでなくとも敵を作りやすい野宮は、人一倍、対外的な活動に重点を置いてきた。執筆活動だけでなく、海外へも積極的に出かけて名前を売り込んだ。そんな時、犠牲になるのは学生たちだったが、野宮は全く気にしなかった。院生にしろ研究生にしろ、実験ロボットぐらいにしか考えていなかった。おそ

らくは今も。
（筵潟先生は、電話の声だけで久保田を思い出した。なのに俺は目の前に立たれてもコイツがかつてここにいた学生だとは気づかなかった。名前さえも思い出せなかった……）
野宮の目が久保田のつむじに注がれる。
この男はふたりのリアルを連れてきたのだという。そのふたりを元の世界に送り返すだけでもヴァーチャル世界の被害を減少させることができる。これはとてつもないことだ。
（気まぐれに構内に引き入れたものの、通用門にコイツが来た時、無視していたら。引き入れた後に身柄を連中に渡していたら――）
血まみれになって倒れる熊男。そして、ふたりのリアルとのコンタクトは永遠に断たれて……。
「ついてこい」
野宮は戸口に向かった。
「え？」久保田が真っ赤になった目を上げる。
「研究室を案内してやる。イヤか？」
「あ、はいはい」
久保田は頭のタオルを結び直すと、勢いよく立ち上がった。

6

ノックの音がした。
ゆっくりとノブがひねられる。顔を出したのはむんだ。
「萠黄、朝ご飯よ」
「うん」
「食べられそう？」
「お腹ぺこぺこ」
「ナイスやね。早よ降りといで」
ドアの隙間からむんの顔が消えた。
萠黄はベッドの上に起き上がると、軽く身繕いをして部屋を出た。
食堂には伊里江もいた。既にちゃっかりと食卓に着いている。
「おまたせじゃー」
キッチンの向こうから、山盛りの野菜サラダを抱えたむんが出てきた。その後ろでお盆にトーストを重ねているのは筵潟夫人である。
「大したものはないけど、遠慮なく召し上がってね」
萠黄はすみませんと頭を下げ、むんの横の席に座った。
意外な展開。昨日会ったばかりの久保田さんの、その恩師のご自宅で朝食をいただこうとしている。
（なんか不思議）

いただきますと四人の声がハモった。
「コーヒーでも紅茶でも、お好きなほうをどうぞ」
夫人の勧めに、むんと伊里江はコーヒーを選んだが、萠黄は紅茶を所望した。
「珍しいなあ」
むんがからかったが、今朝の萠黄には自然な選択だった。
（気分が高ぶってる。今にも弾(はず)み出しそうな）
ティーカップに口をつけると、さざ波のような穏やかさが身体じゅうに広がっていく。疲れもいっしょに洗い流されていくようだ。
昨夜はこの近くで路上駐車し、車の中で仮眠を取った。久保田に連れられて筵潟家に到着したのは今朝方のこと。肝心の教授が大学の中に寝泊まりしてると聞き、一時は落胆した久保田だったが、夫人が会える手はずを整えてくれたらしく、勇んで大学に向かった。
「様子を見てくるから、連絡を待っててくれ」
残った三人は車に戻ろうとした。それを夫人が呼び止めた。よかったらウチで休みなさいと。
「こんなに賑やかな朝食は久しぶり」
夫人が感に堪えないといった顔をしている。
「わたしもです」むんが言う。
「あらそうなの」

「……私も」ぼそりと伊里江。
「あらまあ」
「わたしも――」
言いかけた萠黄は口をつぐんだ。
むんと伊里江はずっと家族なしで過ごしてきた。自分には少し前まで母親がいた。でもこんなに穏やかな朝食風景があったろうか。
（母さんはいつも口うるさくて落ち着かへんかったな）
それでも思い出すたびに、あの日々を渇望している自分がいた。一体どちらが本当の自分なんだろう？
「萠黄さん。お加減はどう？」
夫人が尋ねた。萠黄はあわてて頭を下げる。
「ありがとうございます。おかげ様でだいぶよくなりました」
「そう、それはよかった」
何げない会話なのに、今の萠黄にはじんと来る。
昨夜、自宅で気を失った後、久保田が車まで運んでくれたらしく、気がつくとリアシートの上だった。
その頃にはもう京都市内に入っており、あれが東寺（とうじ）だと久保田の指さすのが聞こえた。
『人類の未来を……君に……託す』
岩村は確かにそう言った。
（誰かに何かを託される資格なんて、自分にはあるんだ

ろうか。わたしに何ができるというんだろうか――）
車の天井を見つめながら、萠黄はそんなことばかり考えていた。
カーブを曲がった時、見上げる車窓に月が現れた。
月はその輪郭を滲(にじ)ませると、母親の顔になった。
母は砂になりながらも、萠黄に笑いかけていた。
月は次に伊里江のヴァーチャルになった。
彼は想いのたけを込めた視線を萠黄に送っていた。
目を閉じてみる。
すると瞼の裏に、他にもたくさんの人の顔が浮かんできた。
（名も知らない警部さん、揣摩さん、柳瀬さん、ホテルの女将さん、猫のウィル……。もう一度みんなに会いたい）
それが唯一の願い。そのためには――。
「ごちそうさまでした」
むんは久しぶりの落ち着いた朝食に満足げだ。立ち上がって空いた皿を重ね、流しに運ぼうとする。
「あらあらいいのよ、わたしがするから」
「いえいえ、これくらいさせてください」
そんなやりとりを見ながら、伊里江がぼそっと呟(つぶや)いた。
「……むんさんって、いわゆる、いい奥さんになれるタイプでしょうか？」

萠黄はむっとしたが言葉が見つからない。しかたがないので伊里江の目の前からわざとらしく皿を取り上げ、自分の皿に重ねると、すたすたと流しに運んだ。
夫人はただただうれしそうに眺めている。
萠黄の脳裏に昨夜の月がぽっかりと浮かんだ。
『そのためには――』
……やれることをやるだけよ。

7

荒井信之は、その朝ひさしぶりにジョギングに出かけた。
ピッチャーとして長年球団のエースの座を守ってきた彼は、この毎朝のジョギングが日課だった。それはシーズン中もオフも変わらない。彼にとっては、走ることが健康状態を知る最良のバロメータなのだ。
だが数日前、突如として球団から外出禁止令が出された。政府の外出自粛勧告を受けてのものだ。
（バカ言ってんじゃねえよ。これ以上家に籠ってたら、身体より先に頭がどうにかなっちまう）
家族の制止を振り切って表に出ると、朝のすがすがしい空気が待っていたように彼を押し包んだ。
（まだ三十代半ば。メジャーリーグは断念したが、この

腕にはもっともっと稼いでもらわなきゃな）
ジャージの中でぐんぐん体温が上がっていく。
川べりの歩行者専用道路を走った後、ダッシュで土手を駆け上がり、いつものように街中へと進路を取った。
商店街は静かだった。荒井はまるで知らない町を走っているような錯覚に陥った。いつもならシャッターを開けた店先からいくつもの顔がおはようと声をかけてくれるのに……。
《アッ電話ですー、ハイハイハイ、電話ですー、ホイホイホイ》
ポケットの中でＰＡＩが着信を知らせた。荒井のＰＡＩは、かつてのお笑いコンビ、カゲヒナタが持ちネタの『電話マン』。彼らが人気絶頂の頃、電話会社とタイアップで作られたＰＡＩのひとつである。荒井はいまだに彼らを超える芸人は現れていないと思っている。
「俺だ。わざわざかけてくるなよ。大丈夫だから」
無断で外出した荒井の身を案じた妻がかけてきたのだ。出がけに病的なほど心配顔を浮かべた妻に、途中で電話するからと言ってあったのに、うっかり忘れていたのだ。
「あと十分ほどで帰宅する。それよりも球団からは何か連絡は――」
その時、携帯を持つ腕に痺（しび）れが走った。
「ウッ」

虫に刺されたかと、荒井はあわてて腕に目をやった。
その目が地面に落ちていく携帯を捉えた。
落としたと思い込み、荒井はキャッチしようと手を伸ばした。
しかし彼の手は携帯を掴むことはできなかった。なぜなら、手は落下中の携帯を握っていたから。
「な――！」
目の前を赤い雪が舞った。正確に言えば、血にまみれた砂だった。
地面に膝をついた荒井は、信じられない思いで、手首から先のない右腕を眺めていた。真っ赤な砂はなおも噴き出し続ける。
「お、俺の黄金の右腕……」
よろめくように跪(ひざまず)いた荒井は、左手で自分の右手を拾い上げた。右手に握られたままの携帯から、もしもし、もしもしと妻が狂ったように呼びかけている。
右手も手首もみるみるうちに砂煙となり、風に飛ばされていく。
荒井の前に、朝陽を遮って人影が差した。
それは、古い映画から抜け出してきたような軍服姿の老人だった。
老人は手に持っていた細い刀を腰の鞘(さや)に納めると、表情のない瞳を荒井に向け、ゆっくりと口を開いた。

「歩行中の携帯使用――都条例違反！」

商店街のはずれにバスが止まっていた。

運転席の窓から顔を覗かせていた狐目の男は、戻ってくる老人を認めるとあわてて飛び出してきた。

「閣下、そちらにおいでしたか？」

とってつけたように敬礼して見せる。見ると、駆け寄った男も老人に合わせたように古ぼけた軍服を着用している。

老人はどこか焦点の合わない目で散歩だと吐き捨てた。

「さいですか。そんなことより閣下、ご覧ください」

男は両手を大げさに広げると、背後のバスに向かって振り上げた。つられて老人は見上げる。

「ようやく我々の足を調達することができました。これで閣下も疲れを気にせず、お好きなところに遠征することができますぜ。――どうやって手に入れたか判りますか？　なんとバス会社が閣下の噂を耳にし、無償で提供してくれたのですよ。閣下の御威光の前にはもはや不可能はありませんや」

この狐目の男、どうも言葉にも所作にも品がない。無償で提供などと言うが、どこまでが本当の話なのか。

「そんなことより……」閣下と呼ばれた老人の口髭が動いた。「何か私宛に連絡はなかったか？」

狐目の男はハッとして後ろを振り返った。バスの窓から別の男が身を乗り出し、両腕でバツ印をこしらえた。
「まだのようです」
「そうか」
老人は落胆の色を隠さず、腰を折って深い息を吐いた。
「閣下！」「閣下ーっ！」
丸めた老人の背中にいくつもの声が降り注いだ。
バスは他にも数台連なっており、それぞれの窓から老若男女さまざまな顔が老人に笑顔を向け、ある者は手を振ったりしていた。
老人を信じてここまでついてきた者たちなのだ。
老人は彼らに何を与えたわけでも、ありがたい訓話を垂れたわけでもない。なのに気がつけばいつの間にかこれだけの人数が彼を慕ってついてきていた。
判らない。判らないことだらけだ。
この世界も、あの日から鏡像のように裏返ったままである。
そして昨日、まるで自分に宛てたかのような宣伝広告を目にした。まともな向きに書かれた字だった。あわてて返事を書いた。たまたま老人の意識が〝良好〟だったことも幸いした。
（どこかにおる。必ずおる。私と同じ境遇の人間が）
それ以来。老人はひたすら相手からの返事を待ちわび

ている。
老人は自分を慕う者たちに手を振って応えた。
（どうかその時の私が〝正気〟でありますよう）

8

「じゅううろくまんんー!?」
むんは驚きのあまり、口を開いたまま天井を仰いだ。
「広告の威力ってスゴいんやねえ」
萠黄は画面に並んだ回答リストをうんざりした面持ちで眺めた。
ＳＳ広告の鏡文字（萠黄にとっては正立文字）メッセージに反応し、返ってきたその数が十六万八千件。
「……みんな家の中にいて、暇を持て余しているからですよ。私は三十万件は来ると踏んでいたのですが」
伊里江が抑揚のない声で言う。
むんは首を振ると、棘（とげ）のある口調で言い返した。
「多すぎるわ。一枚一枚見ていったら、チェックにどれだけかかると思うの。わたしらは人間なんやからね」
性格がアクティブな分、細かいルーティンワークを苦手とするむんは嘆くように額（ひたい）を押さえた。
筵潟家の居間。朝食を終えた三人は、ここに場所を移し、今後の計画についてミニ会議を開いていた。

（それにしてもクラシックな家やなあ）
筵潟家のような住宅は一般に〝町家（まちや）〟と呼ばれている。萠黄も話では聞いたことはあったが足を踏み入れたのは初めてである。教授夫妻は娘さんが嫁いで以来ずっとふたりきりの生活を送っている。萠黄が寝かせてもらった部屋は元は娘さんの部屋で、今は客室として使っているのだそうだ。
建物は古いが、インターネット網は他の一般家庭同様、きちんと敷設されていた。さっきの食堂やこの居間の隅にも液晶スタンドがさりげなく置かれている。
ここに到着する直前、朝焼けに染まる街角にぼうっと光る液晶画面が郵便ポストのように立っているのを見た。入り組んだ京都の街では、地理に不慣れな観光客たちの地図検索などに大いに貢献していることだろう。そして萠黄たちのＳＳ広告もそこに流れていたはず。
教授の勤務する京都工大までは、地下鉄で三駅の近さだと夫人は言った。
むんも伊里江も萠黄も、京都工大に単身乗り込んでいった久保田の帰りを首を長くして待っている。彼が無事、教授に会えたことを祈りながら。
「……私がチェックしますから」
貴重な時間の浪費はご免とばかり、伊里江はさっさとリュックパソコンを取り上げた。昨夜からむんと伊里江

の間にぎくしゃくした空気が漂っている。『ふたりのリアルが同時に危険な場所に赴くのは作戦上好ましくない』と、萠黄のマンション潜入への同行を伊里江が拒否したからだ。
「待って」
「……何か？」
萠黄は両手を差し出した。
「貸して。わたしがやってみる。ううん、わたしのＰＡＩにやらせてみる」
「……萠黄さんの？　ああそう言えば、萠黄さんのＰＡＩはかなり鍛錬が施されていたんでしたね」
萠黄はポケットから携帯を取り出し、伊里江の引き出したパソコンケーブルに接続した。携帯の液晶画面がポンと明るくなる。萠黄は咳払いをひとつして呼びかけた。
「モジ」
ややあって画面の隅から緑色のごつごつした身体が現れた。
《なんでっか？》
「あのな、今から画像データを送るんで、書かれてる文章をチェックしてほしいんよ」
《どのぐらいあんの？》
「ざっと十六万枚」
《げっ》

「あんたやったら大した時間はかかれへんやろ。これまでいろんな文章読んで訓練してもろたんやから」
《俺ひとりでやらなあかんの？　なんやったら――》
ギドラのことは禁句！　萠黄はあわてて言葉を継いだ。
「あんたひとりでやるの！　誰も手伝わへん」
《えーっ、辛気くさー》
チェック方法が説明されると、モジは渋々了解した。
「頼むで。なんせあんたの名前はモジ（文字）やもんな」
《シャレ落ちかい！》
お約束どおり、モジは尻を上に向けてひっくり返った。
あははとむんが笑う。
伊里江はすべての画像を左右反転フィルタを通過させ、順次、萠黄の携帯へと転送した。
ドアがノックされ、夫人がコーヒーのお代わりを持って入ってきた。今度は萠黄もありがたくコーヒーをいただいた。今日は気温が低いので、カップの温かさがうれしい。
夫人は微笑んだだけで下がっていった。久しぶりに華やいだ空気に触れて楽しんでいるように見える。
「これでリアル候補が絞れたとして」むんがコーヒーをすすりながら「その人たちに何て伝える？」
「まずは一時面接、かなあ」萠黄は眉をひそめる。「面と向かって話すなんてわたし向きやないけど、実際に

会ってみないと判らんやろうしね」
「うん、集合場所はこの京都がええかな。久保田さんが戻ったら相談しよ」
モジの作業は三十分で終わった。どうやら念入りにチェックしてくれたようで、伊里江のパソコンに逆転送されたデータには詳細なチェック表が添付されていた。
「記入者の発信元が市町村レベルで判るんやね。おー他にも、記入者が本人であるか否か、連絡先の記入の有無、それに筆跡からの性別や年齢の推定までされてるやん。スゴいねモジくんは！」
むんが何度も賞賛の声を上げていると、廊下をスリッパの音があわただしく近づいてきた。
居間の扉が開くや、筵潟夫人は叫んだ。
「大変ですよ、表に怖そうな人たちが！」

9

（来た！）
三人は無言で顔を見合わせると、素早くそれぞれの支度に取りかかった。伊里江は無言でパソコンを抱え、流れる動作でリュックタイプに変形させる。むんは常に小脇に抱えるている自分のリュックを背負う。萠黄は携帯をポケットに仕舞い、やはりリュックを両肩に掛けて、

足許のナイロン袋を手に持った。中には靴が入っている。
この数日の経験から彼らは備えることの大切さを痛感していた。いつ敵に遭遇するか判らない。その時に備え、どんな状況にいても逃げることができるよう、大事なものは肌身離さず持ち、常に逃げ道を確保しておくという基本的な心構えを、お互いに認識し合っていた。
ナイロン袋を持った三人は、おろおろとする夫人に軽く会釈して横をすり抜けた。萠黄を先頭に居間を出る。順番はあらかじめ決定済み。そしてこんな時、萠黄は自分が先頭になることを譲らなかった。
板廊下を奥へ奥へと摺り足で向かう。
「ストップ」
手を挙げて制止する。耳をすますと勝手口の外からパラパラという靴音が聞こえた。
三人はUターンして階段へと急いだ。こうなったら屋根伝いに逃げるしかない。
(久保田さん、やっぱり捕まったんかなあ……)
胃が鉛を飲み込んだように重い。
(酷い目に遭ったりしてませんように)
音もなく二階に駆け上がる。すぐの和室を横切ると障子窓をサッと開いた。
「あっ!」
萠黄の足が止まった。むんも伊里江も気配を察して、

畳の上に足を止めた。
青空の下、隣接する家の瓦屋根が見える。その上には思い出すのも嫌な迷彩服の男たちが、一定の間隔を置いて立っていた。
「プロを甘く見ないでほしいな」
最も近くにいた長身の男が萠黄に歪んだ笑顔を見せた。まるで子供をあやすように両手を胸の前で振りながら。
（――武器を持ってない？）
いや腰に銃らしきものを携帯している。なのに萠黄たちに向けてはいない。ただ見張るように立っているだけだ。
「あのぉ……」
聞き覚えのない声が三人の背後で上がった。振り向くとそこには、おかっぱ頭の白衣の女性が佇（たたず）んでいた。
彼女はぺこりと頭を下げると、上目遣いに萠黄たちに話しかけてきた。
「わ……わたしは筵潟研究室の助手の和久井（わくい）美穂（みほ）と申します。あの……教授に頼まれて……皆さんのお迎えに上がりました」
「は？」
三人は驚きのあまり、顔を見合わせた。
「心配するなー」屋根の上から長身の男が叫ぶ。「あんたらを無事に届けるのが俺たちの役目だー」

玄関先に大型ジープが待っていた。三人は筵潟家の玄関を出ると、命令されるままに後部座席に乗った。
助手席には和久井と名乗った女性が乗り込んだが、シートベルトを締める彼女の手が小刻みに震えていた。
「出発だー」
運転手が意味もなく大声で叫ぶ。
ジープは後ろに大型の兵員輸送車を従えて発進した。
筵潟夫人が涙目で見送っている。
（お礼も言えなかった）
ジープはぐんぐんとスピードを上げ、筵潟家はあっという間に見えなくなった。
むんは萠黄に顔を寄せて、
「わたしら、手錠されへんかったね。荷物も取り上げられてへんし」
「うん。久保田さんがうまく話をつけてくれたんとちゃう？」
「そうやったらいいけど」
萠黄はいざという時のため、頭に大学までの地図を叩き込んでおいたが、どうやら車はまちがいなくその道を進んでいるようだ。
と、脇道から突然、自転車に乗った青年が飛び出してきた。

ゴンッ。
車体に衝撃が走った。しかしジープは構わず走っていく。振り返った萠黄は、後ろに続く兵員輸送車が倒れた青年と自転車をタイヤの下敷きにするのを見た。
「――！」
全身に鳥肌が立った。声が出なかった。
運転する長身の男が、制帽の下の金色に染めた頭髪を撫でながら、
「ダメだなー。外へ出ちゃいけないってあれほど言われてるのに。悪いコだ」
うっすらと微笑んでいる。
萠黄は目を逸らした。
（この人たち――人を人とも思ってないのか――いや違う、そうじゃない）
こめかみが内部から針で刺したようにチクチクする。
（これがヴァーチャル世界の真の姿や！　警察も頼りにならへん無法地帯なんや！）
和久井助手はずっと震え続けている。もしかすると彼女は何度も似たような光景を目撃したのかもしれない。
到着したのは、間違いなく京都工業大学だった。
正門の扉が重たげに開くと、三人を乗せたジープは吸い込まれるようにキャンパスに入っていく。

ぎょっとしたことに、ジープの通る道の両側に迷彩服の男たちがずらっと立ち並んでいる。彼らの目はどれもジープに注がれ、一様に怒りの色を帯びていた。

（こわーっ）

萠黄たちは高さ十階ほどの丸い建物の前でジープから降りた。壁には『エネルギー工学研究所』と書かれている。

「すみません……そこに手の平を置いてください……入館管理してますので」

及び腰の和久井助手が少し離れたところから指さす。

「……静脈認証ですか」

伊里江が知的好奇心丸出しで認証装置に手を置いた。

「あの……いっしょに目のほうも……」

「はいはい」むんも萠黄も続く。

建物の周囲は工事の音がうるさいほど鳴り響いていた。裏手で大掛かりな建設工事がなされているらしい。こんな非常時にヘルメットを被った作業員が何人も駆け回っている。萠黄は首を傾げた。まるで政府勧告無視じゃないか。

（ああここは特殊区域やったっけ）

認証を終えた三人は、早足の和久井助手について建物に入った。背後には先ほどの運転手を含む数人の迷彩服が、鋭く目を光らせたままぴったりとついてくる。

一行はエレベータに乗った。上に行くものとばかり思っていたが、予想外なことに箱は下に向かって降り始めた。
ヒューンという不気味な音と共に、階数表示がどんどん下がっていく。
萠黄の不安は限界に近づきつつあった。

10

エレベータは地下五階で停止した。
感覚的にはもっと深く潜ったような気がする。萠黄は形容できない息苦しさを感じていた。
扉が開き、こちらですと和久井助手が歩き出す。萠黄、むん、伊里江が後に続く。もちろん監視役の迷彩服もついてくる。
（まさか、このまま誰もいないところで銃殺なんてことはないやろね……）
そうなればせめて浴びた銃弾の一発でも跳ね返してやりたい。一矢報いてやりたい。
ともすれば緊張感でもつれそうになる足を、萠黄は心の中で叱咤した。
背後でくすっと笑い声が漏れる。
「リアルって変な歩きかたをするんだねえ」

例の長身金髪の迷彩服だ。萠黄はひとこと言い返したかったが、その手に警棒状のものが握りしめられているのを見て、相手にするのを断念した。
廊下の天井は恐ろしく高い。目も眩むほどと言いたいが、遥か天井には照明もなく、ただ暗がりが広がっているばかりだ。
萠黄は昔見た映画を思い出した。ヨーロッパのはずれにひっそりと立つ、誰からも忘れ去られた古城。その地下牢獄はこんな風ではなかったか。
——幾重にも張りめぐらされた蜘蛛の巣。
——ぽたりぽたりとしみ出す地下水。
——さまざまな怨念が焼き付いたような壁のしみ。
「萠黄さんかい？」
俯き気味に歩いていた萠黄の耳に、場違いに明るい声が飛び込んできた。
前方の暗闇に切り抜いたような四角い光が落ちていて、その中の丸い影がしきりに動いている
「久保田さん？」
間違いようがない。開いた扉の陰から覗いた頭には、トレードマークの手ぬぐいがしっかりと巻かれている。
久保田はつんのめるようにして萠黄のもとに駆けてきた。
「むんさんも、おう、伊里江君も無事だったか。何はと

もあれ、めでたしめでたしだ」
久保田の広げた両腕が三人を包むように抱きしめた。
萠黄は改めて久保田の大きさに驚くと同時に、絶えて久しい安らぎの感触を味わっていた。
（お父さんの匂いを思い出す――）
伊里江はどう対処していいのか判らず、困った表情を浮かべている。
「あー、久保田」
部屋の中から別の人物が現れた。でっぷりとした腹を突き出した白衣の男。
「話は中に入ってからにしろ。落ち着かんわ」
「これは失礼」久保田は軽く返事すると、三人を伴って明るい部屋へと入っていった。扉を閉めるとき、ついてきた迷彩服たちには「帰れよ、しっしっ」と手で追い払った。意外なことに迷彩服たちはあっさり戻っていった。
招じ入れられた部屋は、処刑を執行する場所でも拷問室でもなかった。広さは二十畳ぐらい。左右の壁に書架が並び、隅には大きな机がでんと置かれている。
「ようこそ我がエネルギー工学研究所へ。私は助教授の野宮甲太郎。この研究所の副所長でもある。そしてここは私の個室だ」
萠黄たちは頭を下げたが、いまだに事情が掴めない。

「あのー、どうしてわたしたちはここに？」
「ん？　何も聞いてないのかね？」
「はい……」
「ったく役に立たんな、和久井クンは」
助教授はひとしきり無能な助手をこき下ろすと、久保田に向かって、説明してあげなさいと命じ、自分は腕を組んで椅子にドスンと腰かけた。
「そうか。ここまで何も聞かされずに連れてこられたのか。そいつはたいそう驚ろいたことだろうな」
ぼりぼりと頭を掻く久保田。
彼は三人を用意してあった丸椅子に座らせると、ここまでの事情を話し始めた。
それによると――。
やっとのことで、かつて在籍した研究室の卒業生であることが認められると、久保田は野宮助教授に全てを打ち明けた。自分がいま行動を共にしているグループに、ふたりのリアルがいると。
当然ながら野宮は仰天した。
久保田は必死に訴えた。この研究室にあるという装置で彼らを元の世界に送り返してやってほしい。そうすれば全てが丸く収まる。
聞けば、彼らの命を奪おうと肉迫した連中がことごとく返り討ちに遭っているという。久保田の友人も命を落

とす結果になった。
「どちらが死んでもつまらねえ話じゃねえか。この男はそう言ったんだ」
いつの間にか、野宮が語り役を奪っていた。
「しかしあんたたちを連れてくるったって、簡単にはいかない。このキャンパスは政府から差し向けられた迷彩服の連中に四六時中ガードされている。映画みたいに外と内をつなぐ隠し通路があったりしないし、宅配の人間に化けて潜入するなんて作戦はかえって命取りだ。だから俺はストレートな方法を提案した」
「ストレートな……」と萠黄。
「そうだ。たまたま連中のヘッドがここに来ていたんだ。そいつに直接掛け合った。すると意外なことに、そいつはリアル受け入れにあっさりOKを出しやがった。それはもう拍子抜けするくらいにな。
あの迷彩服の連中。正式な名称は忘れたが、奴らのリアルに対する敵愾心（てきがいしん）というのは、それはもう半端なものじゃない。隊員の募集時からひたすら『リアルを殺せ』を合言葉にここまでやってきた連中だ。リアル殺害の使命は、頭の中に刷り込まれていると言っていい」
萠黄はキャンパスに入った時に見た、迷彩服たちの噛みつきそうな眼光を思い出した。
「とにかく君たちを表から正式に迎え入れることを了承

させた。冷や汗はかいたが、立場としては私のほうが奴より上なんでな。
部隊にはヘッドから直接その旨が通達された。ヘッドはカリスマ色の強い男で、一応は軍の形式を持つ奴らにとってヘッドの命令は絶対だ。表立って不満の声は出なかったが、心中はどいつも穏やかじゃなかったろう。そこら辺の心配があったので和久井君に迎えに行かせたのだが」
「俺が行くといったんだけど、ヘッドってのが石頭でな。全然聞き入れちゃあくれなかった」
久保田が残念そうに手の平に拳を打ち付ける。
「――石頭ってオレのことか？」
ふいに背後で人の気配がした。
その声に悪意以上のものを感じ、萠黄は戦慄した。

11

助教授室の床は薄いカーペットが敷かれているため、足音らしい足音がしない。それでも萠黄には、男が自分に真っ直ぐ近づいてくるのが手に取るように判った。
男の発する灼けつくような〝気〟が全身を舐め回す。萠黄はゾッとしながらも、恐ろしさに振り返ることができなかった。

男の〝気〟にはどす黒い感情が込められていた。それは悪意？　害意？　それとも、殺意？
いや強いて言うなら、原初的な憎しみとでもいうか。
野宮助教授がたちまち難しい顔をした。
久保田も目を三角にして嫌悪感を示したが、萠黄との間に入ろうと、男に話しかけた。
「隊長さん、紹介します。こちらが――」
しかし男は手を挙げると、久保田の言葉を断ち切った。
男はゆったりとした足取りで、萠黄の前にまわった。
若い男だった。三十を超えてはいまい。
短く刈った髪の色はライトグレイで、髪先は心の内を示すようにハリネズミ状に尖っている。
身長は百六十五前後。
筋骨逞しい身体は、まるでそれ自体が生き物の集合体であるように、迷彩服の下でドクドクと律動している。
太い首の上にある顔は、見ようによっては童顔といえるだろう。しかし左目の上を縦断する古い裂傷が、男の顔貌にこの世のものとは思えない凄みを与えていた。
「真崎だ。リアルキラーズの隊長を務めている」
リアルキラーズ……。
「そう、俺たちはリアル殺し専門に編成された」
「――オイ、あんた！」
久保田が鼻息荒く、真崎の右肩を掴んだ。

トンッ。
真崎の伸ばした指が久保田の胸を押した。たったそれだけで久保田はバランスを崩し、「わ、わ、わ」と腕を振り回しながら床に尻餅をついた。真崎の足は一歩も動いていない。
「約束どおり、危害を加えるつもりはない。そこで静かに見ていろ」
鋭い目が萠黄の顔に戻される。
「――光嶋萠黄だな？」
「……そうです」
「ようやく会えたか。奈良のモデルハウスでは見事に我々の裏をかいてくれた。さらに洲本沖合いの無人島では、米軍の攻撃をかいくぐり、まんまと脱出してのけた。プロの攻撃部隊を手玉に取るとは、まったく見上げたものだよ、リアルさん」
そして顔はそのままに目だけを動かすと、
「そちらの男は、伊里江真佐夫だな」
「な、なんと！　久保田、本当か？」
野宮助教授の激しい問いに、久保田は渋い顔で頷いた。
「しかも」真崎は薄い唇をひと舐めし、「こいつはリアルなんだよ」
「げっ」野宮助教授は驚愕の表情を浮かべながら、まじまじと伊里江の姿を凝視した。「言われてみれば、兄真

佐吉の面影がある……」
「先生も驚いたか？　俺もさっき知ったばかりだ。入館時の認証で過去の膨大なデータと照らし合わせて判ったのさ。残念ながらテロリストの兄貴のデータは写真以外残ってないがな」
その時、伊里江が一歩前に出た。
「……一方的にテロリスト呼ばわりするな！　兄さんをあそこまで追いつめた連中の側にも非はある！」
真崎は目を眇（すが）めると伊里江の顔を不思議そうに覗き込み、
「君は怒っていないのか？　無慈悲な兄貴のせいで弟の貴様まで鏡像世界に投げ込まれたんだぞ」
「……違う！　私は自分の意志で行動した。島に残されていた転送装置でここに来たのだ。兄さんの送り込んだ十二人に私は含まれていない！」
「そうか――判ったぞ！　貴様もグルだな。真佐吉と結託して世界を滅ぼすつもりだろう！」
「……違うと言うのに！　私の目的は、兄さんの過った考えを糾すことだ！」
「嘘も大概にしろ！」真崎は額に青筋を立てて怒鳴った。
「現に貴様はリアルの逃亡を助けているじゃないか！真佐吉の狂った考えに異を唱えるなら、なぜ真っ先にリアルを殺さない!?」

伊里江は言葉に詰まった。真崎は一番痛いところを突いたのだ。
「……私にはリアルを――萠黄さんを撃つことはできなかった。何のためにこの世界にきたのか――」
伊里江は頭を抱えると、がっくりうなだれた。
部屋はエアポケットにはまったように、全ての音が消えた。
フフフと笑い声を漏らしたのは真崎だった。
「まいったね。ちょっと突ついたらホイホイ喋ってくれる。真佐吉の弟にしてはお粗末だな」
（あっ）
萠黄はようやく気づいた。誘導尋問だったのだ。わざと怒らせて相手に喋らせる。基本中の基本じゃないか！
それにしても伊里江は素直すぎた。実の兄という最もセンシティブな部分に触れられたのだとしても、
「確かに貴様は兄貴の片棒を担げるようなタマじゃない。さもなきゃおのれが『十二人には含まれない』などという重要な情報を喋ったりはしないだろうからな」

12

傲慢な笑みを顔全体に浮かべた真崎。伊里江は燃えるような怒りの視線をその笑みにぶつけていた。

（このままだと次に何を口走るか――）
不安に駆られた萠黄が声をかけようとするより早く、むんがスッと真崎の前に立ち塞がった。
「初対面なのに、いきなり無作法な人ですね。取り調べをするならするで、前もって予告してください。こちらの心の準備もありますから」
「ほお」真崎は両目を半ば閉じると、揶揄（やゆ）するような口調で「お前は、北海道事件遺族団の広告塔の女だな」
しかしむんは相手の言葉に取り合わず、じっと黙って相手を見返した。
真崎は不敵な笑みを浮かべたまま、
「ヴァーチャルに用はない、引っ込んでろ……と言いたいところだが、お前の性格からするとしおらしく引っ込んでたりはしないだろうな。舞風むんさんよ」
むんは唇を噛んだが、それでも視線は外さない。
しかし、どうやら既に三人の名前や素性はバレているようだ。
「ＯＫ」真崎は両手の平を見せ、一歩退がった。「そこの先生たちとの約束もある。初顔合わせはこのくらいでお開きにしよう。だがな、最後にひとつだけ教えてくれ――おい、伊里江真佐夫」
フルネームを呼ばれて伊里江は身体を強ばらせた。
「お前の兄、真佐吉は、いまどこにいるんだ？」

もし真崎が〝読心術〟を使えたとしたら、三人の頭の中から容易にひとつの地名を読み取ったことだろう。

――『大津』。

息詰まる時間が経過した。

誰も動かない。伊里江が問われた刹那、サッと顔を背けた以外は。

（それじゃ『知ってます』と言うてるようなもんやん）

萠黄が心の中で厳しく毒ついていると、

「もういい。真崎さんとやら、席を外してくれ」

久保田が言い放った。怒鳴るのをやっと抑えてるという声で。

「判ったよ」

真崎は肩をすくめると、ドアのほうに歩き出したが、すぐ立ち止まり、

「その代わり、例の話をこいつらにちゃんと言い聞かせとけよ」

「くどいな」

真崎はドアノブを回した。そして部屋を出ようとした瞬間、さりげなく横で睨みをきかせているむんに顔を向けると、こう言った。

「リアルに付き合ってても良いことはないぞ。お前は連中とは違うんだからな」

むんが投げた片方の靴は、ギリギリのところで閉じた

ドアに当たって大きな音を立てた。

野宮助教授は四人を伴い、壁ひとつ隔てた隣りの部屋に移動した。そこは小さな会議室で、中央に置かれた長テーブルを十人も囲めば満員になりそうな広さだった。

テーブルの端には大型液晶画面付きのパソコン端末が設置されている。助教授室と廊下に面した壁にはそれぞれドアがあるだけ。地下だから当然窓はなく、いたって殺風景な部屋である。壁の色はライトブルー。助教授室もそうだったし、ここに来るまでのエレベータや廊下も同じ色で統一されていた。

（なんとなく気の引き締まる色。そんな効果を狙ってるのかも。理系の大学ってどこもこんなんかな？）

会議室などという場所に入ること自体、萠黄にとっては初体験である。憧れまじりで首を巡らせていたが、落ち込んだまま面を伏せている伊里江と、いまだ興奮冷めやらないむんが目に入ると、あわてて視線を落とした。

「まあ、適当に座ってくれ」

野宮は言うと、そばのインターホンを押して、和久井助手にコーヒーを五つ持ってくるよう言いつけた。

「あの真崎という奴は、人の神経を逆撫でするのが趣味のような男でな。気にすることはないぞ」

反応はない。

萠黄はおずおずと久保田に目線を送った。彼はその意味を感じとったらしく、野宮に向かって、
「先生、彼女らにしてみりゃ先生だって初対面の人間だし、突然こんな地下に連れてこられたんだ。そうそう急にリラックスはできねえよ」
「むう……そんなもんかな」
野宮は困った顔をすると、白衣のポケットをまさぐってチューイングガムを取り出し、無造作に紙を剥(む)いてポイッと口の中に放り込んだ。
モグモグ動く口と連動するように太鼓腹が揺れる。萠黄は不思議な生き物でも見るように、腹の曲線が上下動するのを眺めていた。
ノックがした。廊下側のドアが開いて和久井助手がコーヒーを乗せたワゴンを部屋の中に運び入れた。和久井はホテルのルームサービスよろしく、五人の前にカップを置いてまわる。そして丁寧にお辞儀をして出て行った頃には、部屋は香(かぐわ)しいコーヒーの匂いが充満していた。萠黄はようやく緊張の糸がほぐれるのを感じた。
チラッとむんに目をやる。すぐ横の椅子に腰かけたむんは、まだ思いつめた顔で空中を睨んでいる。
萠黄は手を伸ばし、テーブルの下でむんの左手に触れた。すると意外なことにむんは一瞬手を引っ込めようとした。

（えっ？）
萠黄はハッと息を飲んだ。
助教授室でむんは完全にキレてしまった。ドア目がけて靴を投げた後、何か叫んだようだったが萠黄には聴き取れなかった。
鬼のような形相。そんな親友を見るのは初めてだった。それだけ真崎のひと言は彼女を傷つけたのだといえる。
萠黄は逃がすまいと腕を伸ばし、むんの手を強引に握った。むんの肩から力が抜け、目から涙があふれ出すと、そのままもう一方の腕で顔を包むように机に突っ伏した。
萠黄は握る手を換え、むんの肩を後ろから抱いた。
男たちは狼狽と戸惑いで、互いに顔を見合わせるしかなかった。

13

「あの、どこかゆっくり休める部屋はありませんか？」
萠黄は野宮に懇願の目を向けた。むんをこのままにはしておけない。
しかし野宮はすぐに首を振った。
「君たちには当分このエネ研にいてもらわねばならんが、居室の準備がまだできとらんのだよ。あまりに急だった

もんでな」
「わたしなら――すいません、どうぞお構いなく」
わずかに顎を上げたむんの頬は血の気がなかった。それでも萠黄に小さくありがとうと言うと、髪を顔に垂らしたまま頭を下げ、
「お話を続けてください。わたしも聞かなければなりません」
と胸を張り、居ずまいを正した。
萠黄には掛けるべき言葉が見つかなかった。
と、久保田がすたすたとむんの後ろにまわり、背後から彼女の肩に手を置いた。もう片方の手は萠黄の肩に掛けられた。
「俺もヴァーチャルだ。でも何の関係もない。俺たちはみんな生きてる人間だし、仲間だ」
むんがぎこちなく頷いた。
萠黄はひとまず胸を撫で下ろした。もちろんどこまで久保田や萠黄の気持ちが伝わったかは判らない。握った手は離してはいなかったが、むんは握り返しては来なかった
「まず、コーヒーをいただいちまおうか」
久保田の提案に全員がカップを持ち上げた。萠黄はしぶしぶ手を離した。

部屋は空調のせいで涼しいくらいだ。そのせいもあり、胃に落ちた熱い液体はしみいるような快感となって体全体にじんわりと広がっていった。

野宮はマウスに触れた。パソコンはスリープ状態から解かれると、大型液晶画面の中央に丸いアナログ時計を表示した。

「あまり時間がない。十一時に政府との定例報告会があるんでな。すまんがとっとと話を進めさせてもらうぞ」

あと四十分。萠黄たちは姿勢を変えて野宮の顔を見た。

「君たちも午後になれば個別に事情聴取されることになろう。一応覚悟しといてくれ。そのためにも前知識としてこの施設のことや現在我々が置かれている状況を教えておこうと思う」

画面に建物の平面図が現れた。キャンパスの全体図らしい。萠黄たちの入ってきた通用門のそばで赤い丸が点滅していた。

「これが今いるエネ研――エネルギー工学研究所の実験棟だ。この春、落成したばかりの急ごしらえの建物だが、今や事態の打開を図る研究者の総本山でもある。私や筵潟教授など元からこの大学におった者ばかりではない。関連企業の研究員も多数、席を並べている。まあ迷彩服の嫌らしい連中や政府のお目付役という邪魔者も混じっとるがな」

「……転送装置が完成したそうですね」
伊里江がぼそりと口を挟んだ。
「そうか、君たちにとって最大の関心事はそれだったな。そう、確かに装置は完成している」
声にならないどよめきが皆の口から漏れた。しかし野宮は難しい顔をしたまま、
「完成はしたが、実用に至るにはまだ数日かかる」
「どうして？」と、むん。
「うむ……この装置を作動させるには莫大な電力が必要なんだ。学内の設備では京都中を停電にしたって到底足りるもんじゃない。そこで急遽、建物横に発電所をおっ建てることになってな。ここに入る前に見なかったかね？　トンカンうるさい音が響き渡っとったろ」
ははあ、と萠黄が納得の声を上げる。
「エネ研の主たる目的は伊里江真佐吉の計画阻止、つまりは巨大ブラックホールをいかに無力化するかというところにある。転送装置はあくまで偶然の産物だった。しかし切迫した状況で方策はいくつあってもいい。私は政府に掛け合った。『この装置でリアルを元の世界に転送すればブラックホールは生まれないわけで、これもひとつの解決策だ』と。問題はその供給電力だったが、二十四時間態勢の突貫工事を政府が約束してくれたのでどうにか道は開けた。あとはリアルを集めるだけだ」

「……稼働するのはいつですか？」
話が途切れるのを待って伊里江が質問した。野宮は指を三本立てた。
「予定では三日後。完成すればひとり当たり一時間で向こうの世界に転送可能だ」
さすが、と久保田が感嘆の声を上げた。しかし野宮は渋面を浮かべると、手の平を激しく振った。
「褒めるのは早すぎる。なにしろまだ一度も実験してないんだから」
「えっ、どうして？」
久保田の質問に伊里江が答えた。
「……実験台のリアルがいなかったから」
「あ、そっか」
「あのう」萠黄が伸び上がるように手を挙げた。「ブラックホールって光でも何でも全て吸い込んでしまうと聞いてます。だからこそ中を覗き込んでも、真っ暗闇にしか見えないんだと。それなのに、できたブラックホールがちゃんと向こう側に通じてると、どうして判るんですか？」

14

「ウーン、いい質問ではある。ではあるが説明している

時間的余裕はない」
　野宮は冷たく言い放ったが、それではあんまりだと思ったのか、
「まあ大雑把に言うとだな。二個のブラックホールを干渉させるんだ」
「二個を干渉？」
「そう、一方のブラックホールに、別の小さなブラックホールを近づける。すると当然二個は互いに引き合うわけだ。引き合いながらも、大きなほうは小さいほうを飲み込もうとする。ところがこの時、二個の間には引っ張り合う力が均衡する点というのが両者を結んだ線上に出現する」
　野宮の手がマウスをクリックした。すると画面に大小二個の球が現れた。そして両者の間の少し小さいほう寄りに黄色く光る＋印が点滅している。二個の球が近づきあうほどに＋印も微妙に位置をずらしていく。
「……＋では重力がゼロになるのですね」と伊里江。
「そうだ。我々はゼロG点と呼んでいる。このどちらにも引きずり込まれない点上に居さえすれば、熊であろうが蟻であろうが、二個のブラックホールが互いに激突する瞬間まで平気でいることができる。そこで我々は、ゼロG点にマイクロ飛行艇を飛ばすことにした」
　画面が切り替わった。今度はビデオカメラで撮られた

映像だ。非常に窮屈そうな部屋の中に、その四角い実験装置は置かれている。横に立つ野宮の背丈と比べると装置はかなりの大きさだ。

カメラが寄る。装置は上半分が透明ガラスで覆われており、中は明るい。その明るい中に黒くぼやけた雲状のものがふたつ浮かんでいる。

（ふたつ？　……ということは、これが）

「人工ブラックホールだ」萠黄の見当を、野宮が補足した。「これは四日前におこなった実験の記録だ。ほら今、マイクロ飛行艇が射出された」

予告されたとおり、画面の端から小さな物体が黒雲に向かってゆっくりと進み出した。

ここでまた映像が切り替わった。今度はマイクロ飛行艇搭載のカメラ映像らしい。

「飛行艇の鼻面は大きいほうのブラックホールを向いている。もうじき、リアルの世界が見えてくる。ここからは瞬（まばた）き禁止だぞ」

萠黄は緊張に生唾を飲み込んだ。いつの間にか爪が食い込むぐらい拳をきつく握りしめている。

（リアルの世界、わたしの居るべき世界！）

飛行艇は雲に突入し、画面は真っ暗になった。画面下の秒数表示がめまぐるしく変化している。早回しにしているのだ。

「さあ、いよいよだ。まさに二個のブラックホールが重なろうとする直前――！」
自己陶酔した野宮の声がファンファーレのように耳を打つ。萠黄も煽(あお)られてテーブルに乗り出し、期待感に身を震わせていた。
画面がカッと光り輝いた――。
だがそう思ったのは一瞬で、輝きが収まると液晶画面には大きな文字が三つ浮かび上がった。

千日前

「……」
「……せん・にち・まえ？」
「これって……？」
その通り！　と野宮が腕を突き上げて絶叫した。
「ストライクだろ？　カメラは見事に狙った標的を捉えたんだ。どうだい、光嶋クン」
呼ばれて萠黄の目は、助教授と画面の間を行ったり来たりしたが、ようやく実験の目的を思い出した。
「そうですね……えっと、文字はわたしの慣れ親しんだ向きになってます」
「だろう？」
野宮は得意満面といった調子でポンと腹を打った。

映像が映し出したのは、大阪ミナミの中心地ともいえる場所、千日前商店街アーケードの入口である。「千日前」の三文字はまさしく左から右に配置されている。疑いようもなく、それはリアル世界だった。

遠出の経験の少ない萠黄にもその景色は身覚えがあった。この先には大阪の誇る日本橋電気街がある。

しかし。

「あのー、なんで千日前なんですか？」

萠黄は思い切って訊ねてみた。すると野宮はよくぞ質問してくれたとばかり、妙なウインクをしてみせると、

「生まれ故郷なんだ」

「先生のですか？」

「そう、私は千日前の老舗料理屋の次男坊として生まれ、この街で育った。だから街の隅々までよく知っておる。実験するからには裏返しになってもピンとくる場所でないといかんだろ？　だから実験当日、装置を一式、大型トレーラーに乗せてわざわざ大阪まで行ったんだ」

「でも先生サンよお」今度は久保田が訊ねる。「ここは京都なんだから、わざわざ大阪くんだりまで出て行かなくても、もっとこう気の利いた場所というか、たとえば清水寺とか金閣寺とかのほうが良かったんじゃないかい？」

「何をヌカす！」野宮は憤慨した。「見てたろ？　あの

小さなマイクロ飛行艇を。超小型ＣＣＤカメラを積載した飛行艇はな、目標に向けて正確に飛ばすのが極めて難しいのだ。お前のような落第モンには判るまい」

「いえ、俺は自主退学でして」

「どっちでもいい！　あのな、建築物というのはちょっと見る角度を誤るとワケが判らんようになるんだ。だから私はあえて――」

「はいはい、もう納得しましたから、どうか落ち着いてください」

久保田は両手で野宮の肩を叩き、何度も頭を下げた。

（わたしはなんとなく嵐山の風景なんかを想像してたけど――、よりによって千日前が出てくるなんて）

「……教えてもらいたいんですが」

伊里江が挙手した。皆の視線が彼に集まる。

「……千日前とは、いったい何のイベントのカウントダウンなのですか？」

（？？？）

わずかの後、小会議室は爆笑の渦に巻き込まれた。

久保田は腹を抱えて。野宮はむせるように。萠黄は涙を流しながら。伊里江だけはずっと、きょとんとしたままだった。

萠黄はさりげなくむんに視線を向けた。彼女も口許を押さえながら、くくくと忍び笑いをしていた。

15

「カッカッカ、先生って意外とベタな笑いで場をかっさらっちゃう人ですかい？」
笑った弾みで弛(ゆる)んだらしい。久保田は頭に巻いていた手ぬぐいをはずした。
「ヘタな笑い？　下手ってなんだ！」
野宮は真剣に目くじらを立てている。おそらくみんなが笑った理由を理解することは、この助教授には難しいかもしれない。
ドンッ。
突然前触れもなくドアが激しく揺れた。誰かが表から強い力で叩いたようだ。何か硬い物で。
久保田は手ぬぐいを拳に巻きつけると、肩を怒らせてドアに近づいた。
「相手にするんじゃない」
野宮の注意にも耳を貸さず、久保田の手は躊躇なくドアを開けた。
廊下を遠ざかる足の停まる気配がした。久保田が睨む先にドアを鳴らした人間がいるのだ。楽しげな笑い声にいらついた人間が。
と、久保田はなめし革のような大きな舌を、喉の奥か

ら相手に向かってビュッと突き出した。
「ベーロベロベロベロ」
彼はやるだけのことをやると、すぐにドアを閉め、素早く内鍵まで掛けた。外を駆け戻ってくる足音がする。
ドンドンドンッ。てめーこのやろーなどと罵りの声がドアの外で炸裂する。
久保田は「おーコワいコワい」などとおちゃらけた声を上げながらテーブルのそばに戻ってきた。野宮は困ったやつだとばかり眉を顰(ひそ)めている。
「迷彩服どもの心証を悪くすると、ここの居心地が悪くなるばかりだぞ。まったく子供じゃあるまいし」
だが野宮の小言など馬耳東風とばかり、久保田はハーイと子供返事を返し、口笛を吹いている。
萠黄とむんは笑いをこらえるのに必死だった。
その時――。
萠黄の中で小さな爆発が起こった。
線香花火のように小さな火花が瞼の裏で四散した。
凍えるように冷たい光だった。
光は萠黄の心臓をひと撫ですると、あっという間に消え去った。
(何？　今の……)
呆然と胸の辺りを見おろしたが、何も変わったところはない。

しかし萠黄の頭はその意味を察していた。
リアルの直感――。
（こんな風にみんなと笑いあう機会は、この先もうないのかもしれない）
それはあまりに哀しい直感だった。

笑いが収まると、全員の視線は再び画面に集中した。
「撮影できた風景はわずか二秒。しかし間違いなくリアル世界だ。こちらとは裏返しになった文字が確認できたしな」
「同じ方法で、向こうに行くことができるんですな？」
久保田の問いに野宮は大きく頷いた。
「生体実験はまだだが、東京から輸送されてきた検体を用いて、向こう側への移送が可能なことは既に確認してある」
「検体？」と萠黄。
野宮はあっさりと答えた。
「ハモリの遺体だ」
あっと皆が叫んだ。
「もっとも使用したのは彼の髪の毛のみだったが」
「他の――リアルの人たちは？」
野宮は首を横に振った。
「残念ながら、遺体のかけらも残っとらん」

萠黄は胃液がこみ上げてくるのを感じた。
遺体すら残らない殺されかた……。
既に四人のリアルが死亡たというショッキングな事実を、先ほど教えられたばかりだ。ハモリ氏を除く三人はいったいどんな最期を迎えたのだろうか。
（ひとつ間違えれば、わたしもそうなってた――彼らも転送装置が完成してたら死なんでも済んだのに）

時計を見た野宮がイカンと小さく叫んだ。
「もうあまり時間がない。とりあえず必要事項だけ伝えておくぞ。
まずリアルのふたり。君たちは、電力設備が完成して転送装置が稼働し次第、元の世界に帰ってもらう。それまではこの建物の居住エリアで過ごしてくれ。そちらの女性とお前」久保田を顎で指した。「お前も事情を知った関係者だ、ここから出すわけにはいかないので同じく居住エリア行きだ」
ていのいい軟禁や。萠黄は唇を尖らせた。
「さて、この建物は地下一階から五階までが吹き抜けの巨大な実験室になっておる。転送装置もそこにある」
それで廊下の天井があんなに高かったのか。
「あとは私らの部屋があるくらいだ。君たちの居住してもらう部屋はこのひとつ下の地下六階にある。

さっきみたいに物騒な迷彩服どもが、この建物を含め、キャンパス内をくまなくパトロールしておる。鬱陶(うっとう)しい限りだが安心してくれ、連中はこの地下五階までしか入れん規則になっておる。安眠を妨害されることはないだろう」

物は言い様である。結局は頭を抑えつけて逃亡できないようにしているのだ。

「そして最後にひとつ。あの真崎に幾度も念押しされとるので伝えんわけにはいかん。

君たちなんだろう？　この広告を打ったのは」

マウス操作で画面にスクリーンセーバーが立ち上がった。すぐに映ったのは萠黄たちが加太のホテルで作ったSS広告だった。

（うわ、まだオンエアされてたんや）

しかし三人は示し合わせたように無言を守った。

野宮は息をひとつ吐くと、

「黙秘されても、とうにバレとるよ。迷彩服たちは、広告の隅に掲載された男性の写真から舞風クンの線を掴(つか)んだらしい。その時点でハッキングされとる全ての人工衛星を機能停止にすることもできた。おそらく君らも遅かれ早かれそうなると予想しとっただろう。

だがそうはならなかった。なぜか判るか？」

萠黄はおもむろに顔を上げた。

「ほう、光嶋クンは気づいたようだな」
「広告に反応を示したリアルたちに、ここへ集まるよう、呼びかけさせるためですね？」
野宮は両腕を組んで深く頷いた。
萠黄は続ける。
「迷彩服たちがわたしたちに手を出さなかった理由もそれでしょう？」
「君はなかなか聡(さと)い女の子だな。回転が速い。こんな時でなければ、私の研究室に欲しいところだよ」
萠黄は苦笑を浮かべた。
「馬鹿にしないでください。初めから判ってましたよ」

16

むんがそばで息を飲むのを感じた。しかし萠黄の舌は止まらなかった。
「リアルを日本中から残らず集めてしまえば、万が一、元の世界へ転送できなくても、皆殺しにすれば解決するんですからね」
「万が一とはどういうことかね？」
野宮が顎を突き出す。しかし萠黄は面を伏せると、
「そんな気がしただけです」
「実験は百パーセント成功しとる。君たちリアルは確実

に元の世界に戻れるんだぞ。感謝されこそすれ、憎まれ口を叩かれる謂(いわ)れはない。ましてや失敗するなどと縁起でもないことを言わんでくれたまえ」

「感謝？」

萠黄は両手をテーブルについて立ち上がった。込み上げる思いとは裏腹に、声は低く、口調は緩慢になっていく。

「何言うてますのん、わたしは好き好(この)んでリアルになったんやないんですよ。被害者なんですよ。責任者が頭を揃えてわたしらの前で『すまんかった』と頭を下げるほうが筋とちゃいますか？」

「……」

「それに用があるのはリアルのわたしとエリーさんだけでしょ？　むんまで連れてきたのは、わたしが命令に従わない場合、脅しに利用するためやないですか？　あの強面(こわもて)のリーダーさんならそれぐらい考えそうですよね」

「……」

「そこまで知った上で、わたしはおとなしく連行されてきたんです。でなければわたしとエリーさんは徹底抗戦して、リアルパワーの底力を思い知ることになってましたよ。先生はご存知かどうか知りませんが、この世界にいる限り、リアルは超人なんです」

「聞いておる。東北で見つかったリアルは、激しい抵抗

の末に亡くなったのだが、その際、街がひとつ壊滅したという」
　萠黄はしばし目を閉じた。まるで死んだ仲間の冥福を祈るかのように。
「……リアル集めには協力します。候補者はすでに絞ってますから、すぐにでも連絡することができます。早いほうがいいでしょうからね。そのためには無駄なことに時間を取られたくありません。午後に予定されているという個別尋問はパスさせてください」
「しかしそれは――」
「皆さんへの説得は先生にお任せします。それから」萠黄はその話は済んだとばかり話題を転じ、「パソコンを修理したいんですけど、工具一式を貸していただけますか？」
「あ、ああ、君らの居住エリアと同じ階に工作室がある。自由に使うといい」
「ありがとうございます」
　萠黄は馬鹿丁寧なほどうやうやしく頭を下げた。

　十一時の時報が鳴ると野宮助教授は「また話そう」と言い残し、大急ぎで部屋を飛び出していった。
　入れ替わりに和久井助手がやってくると、おどおどした様子で入口に立ったまま、これから居住エリアにご案

内しますと告げた。
萠黄たちは廊下側にではなく、助教授室へと一旦戻され、そこから別のドアへと導かれた。
いきなり広い部屋に足を踏み入れた四人は、うわぁと感嘆の声を上げた。五階分が吹き抜けになった円筒状の空間には、無数の液晶モニタや実験装置がひしめいており、その間では白衣姿の人々が自分たちの仕事を黙々とこなしていた。
「あの、ここがメインの研究ルームです」
部屋の中央に、ひと際異彩を放つ巨大な球体があった。萠黄にはそれが転送装置であるとすぐに判った。伊里江の島で見たものによく似ていた。巨大な地球ゴマは六重のリングが合わさって構成されており、外側を透明な局面ガラスが覆っていた。
萠黄は一歩二歩と歩み寄った。
（今度こそ……今度こそホンマに帰れるんやろか）
ガラスに自分の姿が映っていた。
気がつくと、その後ろにいくつもの顔が風船のように浮かんでいるのが見えた。
「……？」
首を捻ると、人々はバツが悪そうに目を逸らし、白衣をひるがえして装置の間に散っていった。
（あれがリアルだ）

（なんだ、普通の女の子じゃないか）
（バカ言うな、爆弾を抱えてるようなもんだぜ）
（存在自体が爆弾なんだ）
（細胞レベルで左右が反対とはな。よくこの世界で生きてられるな）
（バケモノなのさ）
その時、萠黄の肩にふわりと手が乗った。
「さあ、行こうか」
久保田の声が優しく促(うなが)した。
ふたりは部屋の反対側にあるエレベータの前で待っていた伊里江たちと合流した。
和久井助手が手の平をボタン横の読取機にスキャンさせ、エレベータの分厚い扉を開いた。
五人が箱の中に入るとエレベータは音もなく動き出した。
地下六階、七階、八階……。
「……なるほどここから下の階は、地上へ直通してないのか」
伊里江の独り言に萠黄は頷いた。
エレベータが停まったのは地下十階だった。数字は十までしかない。
扉が開く。そこには暗い廊下を挟む剥(む)き出しのコンクリート壁が待っていた。

「建築業者もさすがに手が回らなかったと見える」
久保田がため息まじりに呟いた。
和久井は四人に居室の位置を教えると、そそくさとエレベータに乗り込み、あっという間に上の階へと戻っていった。
「愛想も何もないねえさんだな」
「――すみません」
「ん？　なんで萠黄さんが謝る？」
「妹さんのところに帰れなくなりましたね」
「ああ……まあしょうがないさ。そんなことより部屋を覗いてみようぜ。冷蔵庫に酒が入ってるといいけどな」
四人はひとまず部屋のひとつに入ってみた。
打ちっぱなしの壁面を見た時からいい予想はしていなかったものの、中は存外普通の居住空間の体裁を揃えていた。バストイレがあり、テレビやソファセット、そしてベッドがあり、窓がない以外は、中クラスのビジネスホテルといった塩梅（あんばい）だ。備え付けの冷蔵庫にはドリンク類や簡単なスナック菓子が入っていた。
「くそ、やっぱり酒はないか。文句言ってやる」
怒ってドアに向かう真似をした久保田に伊里江が声をかけた。
「……無理ですよ。我々にはエレベータを呼べません」
「なんだって？」

「……さっき試したのですが、私の手の平では認証してくれませんでした」
「冗談だろ!?」
久保田は部屋を飛び出した。萠黄も後を追う。
（わたしたち、自分の意思では上に行かれへん？）
久保田は読取機に何度も手の平をかざしたり、こすりつけたりを繰り返した。だがエレベータは無反応だった。
「ちっくしょー。そうならそうと先に言えよ！」
萠黄はしかし、これもありかなと思っていた。
自分たちは決してお客ではない。処理されるべき爆弾なのだ。生きた核爆弾……。
きっと他人には自爆テロリストと同列にしか見えないのだろう。牢屋に入れられないだけマシというものだ。
「テレビを見て！　早く！」
部屋の中でむんが叫んでいた。その声に鬼気迫るものを感じた久保田と萠黄は、急いで部屋に駆け戻った。
「臨時ニュースをやってる！　政府の誰かが緊急記者会見してるらしいわ」
後になって判ったが、そのニュースはヴァーチャル世界誕生以来、最大の衝撃を日本国民に与えたのだった。
まさしく〝激震〟だった。

17

笹倉防衛庁長官、緊急記者会見。
ＮＨＫらしく、そっけないテロップの並んだ画面。そこには頭髪の薄い五十がらみの男性が、思い詰めた表情でテーブルに置いた両手の爪を見つめていた。
（――これが防衛庁長官）
「このうらぶれたおっさんが本当に長官なのかい？　確か総理と同期だったと記憶してるが、とても五十歳には見えないな」
そのとおりだ。画面でしょぼくれている男性は、控えめに見ても六十過ぎの容貌をしている。
《始めてもよろしいでしょうか？》
進行役のアナウンサーらしき女性の声がした。笹倉は夢から覚めたように顔を上げると、顔を傾けて曖昧に頷いてみせた。
《それではただいまより記者会見を始めさせていただきます。長官、どうぞ》
促された笹倉はすぐに声を出そうとして痰（たん）が絡んだらしい。そばに用意されたコップに手を伸ばすと、煽るように飲み干した。こぼれた水が顎から首筋にしたたる。
「なんでえコイツ、ネクタイを締めてないなと思ったら、ジャージじゃねえか」
「会見場は、長官の自宅なんやって。これは緊急特番で、

全然予定されてなかったって言うてたわ」
「しかしなんで自宅なんかで？」
「……シーッ」
伊里江が唇に指をあてるのと同時に長官は話し始めた。
《放送をご覧の国民の皆さん、私が今から申し上げる話は全て事実です。信じられない、あり得ないと思われるかたも多いでしょうが、どうかひとまず最後まで冷静に私の話をお聴きください。国民の皆さんひとりひとりに関わることなのです。
最初にお断りしておきますが、この記者会見は私の一存で開かせてもらいました。政府は一切関知しておりません。おそらく今頃、首相官邸では私の独断専行を知り、当惑していることでしょう。政府は全てを秘密裡に解決しようとしていたのですから……。しかしそれも限界です。私は今こそ国民の皆様に真実を知っていただき、共に困難に立ち向かうべきだと信じて、急遽この場を設けさせていただきました》
（それで自宅なのか――）
笹倉は一呼吸おくと、片手で頭髪を梳（す）き、自らの決意を確認するように二三度頷いた。
《皆さんもご存知の北海道消失。じつはあれは天災ではなく人災だったのです。それもたったひとりの科学者、伊里江真佐吉が引き起こしたことなのです。

伊里江というのは、かつてブラックホール騒動を起こしたマッドサイエンティストです。彼は私利私欲のため、価値ある研究を独占するべく、重要なデータと共に、所属していた研究所から姿をくらましました。

その後、彼が失踪時に書き残した言葉が一人歩きをし、人工ブラックホールなどというのはでまかせの嘘っぱちだという認識が一般に広まりました。ところがそれこそが嘘、まやかしだったのです。実際彼はブラックホールを作り出すことに成功していました。

身を隠した後、伊里江は自らの発明の売り込みを開始しました。ブラックホールは無尽蔵ともいえるエネルギーを生み出します。金のなる木どころか、この世界の有り様を一変させる技術です。欲しがらない者などいるわけはありません。大は軍事国家から、小はテロリスト集団まで――。

強大な力を持った者の宿命でしょうか。伊里江は発明の価値を高めようと、いえ、自ら世界の王となるため、その力を誇示することを思いついたのです。

かくして北海道は彼の指先一本で消滅しました。

彼は、世界が自分の前に跪(ひざまず)くことを望みました。そして我が国政府に対して、到底不可能な待遇の実現を要求してきたのです。

私の長年の同志であり、現内閣総理大臣である山寺鋭

一は当然この要求を突っぱねました。ところが既に狂気に囚(とら)われていた伊里江はそれを不服とし、最後の一線を越えてしまったのです》

笹倉は言葉を切ると、水のお代わりを要求した。いつの間にかその眼には炯々(けいけい)とした光が宿っていた。今や伝えることの使命感が彼の全身を支配している。

（長官はヴァーチャル世界の正体を国民に暴露しようとしてる。そんなことして何になる？　まさか――）

「……汚(きたな)い」

萠黄の耳が、伊里江・弟の怒気のこもったつぶやきを捉えた。彼は血の昇った顔を画面に向け、震える指先を笹倉に向けた。

「……兄さんひとりを悪者にするつもりですか……これでは欠席裁判じゃないですか！　卑怯！　卑怯！　卑怯です！」

「落ち着け、青年」

久保田が諌(いさ)めたが、伊里江は聞く耳を持たない。

「……この男、次にこう言いますよ。『皆さんで伊里江真佐吉を探してください。発見次第、血祭りに上げるのです。そうすれば世界は救われます』と！」

（それだ！）

萠黄は画面に目を戻した。真佐吉の公開指名手配。記者会見はそれが狙いだったのだ。

笹倉の話は続く。
伊里江真佐吉は自暴自棄になり、とうとう世界を丸ごとブラックホールに飲み込ませるという最悪の手段に出た。九日後、世界は終末を迎える――。
萠黄たちにとっては既成事実として受け入れている事柄が淡々と語られていく。初めて耳にした人々はどんな風に受け止めることだろう。
（戒厳令のせいでほとんどの国民は家にいる。この番組の視聴率も当然高いはず。やられたな。こんなことならわたしらもマスコミを利用する方法を考えるべきやった。どうしたらええかは判らへんけど）
萠黄が考えごとをしている間にも会見は進み、長官の話はいよいよ終盤を迎えた。
「……まさか兄の顔写真を公開するんじゃ」
伊里江の呟きに、他の四人もそうなるだろうと予測した。それ以外には考えられない。
しかし笹倉が最後に口にした言葉は、その予想を完全に裏切るものだった。
《――残念なことに、真佐吉の顔画像は一切残されていません。しかし皆さんにもできることがあります。
あなたの身の回りに、突然左右の風景が入れ替わってしまったという人はいませんか？　右利きなのに突然左利きになってしまった人を見かけませんか？

それがリアルなのです。
私たちの平和な世界を脅かすマッドサイエンティストの申し子なのです。
皆さん！　今すぐリアルを殺してください。
息の根を止めてください。
そうすればこの世界は救われます！》

〈第十二章につづく〉